



Title	「海豹」：太宰治にとってのspringボード
Author(s)	滝口, 明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 8-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「海豹」

— 太宰治にとってのスプリングボード

滝 口 明 祥

現在、太宰治の「魚服記」や「思ひ出」が載った雑誌として記憶されている「海豹」は、一九三三年三月一日に創刊された。発行元は図書研究社。その前年に大鹿卓と神戸雄一が編集した「ヌーヴェル」が廃刊し、その「残党」によって始められたのがこの雑誌であると古谷綱武「昭和八年・九年」(『太宰治全集 第一巻 附録』一九四八、八雲書店)は説明している。

同人は大鹿、神戸の他に今官一、新庄嘉章、古谷綱武、木山捷平などであった。一九三三年一月二十九日に行われた会合で創刊号を出すことが決まったのだが、その際、今は太宰治の参加を熱心に主張したという。しかし今以外の同人たちは、太宰のことは知らず、ともかく作品を見てから、ということとなり、それで古谷のもとに届けられたのが後に創刊号に載ることとなる。「魚服記」なのだ。しかもそれは毛筆で書かれたものであった。もちろん、当時においても毛筆で原稿を書く青年は珍しい。古谷は「このきれいな筆の字を見て、それだけでもう私はそうとう気圧されてしまった」というし、木山捷平も「僕はその、何度も書き直したであらう精進ぶりに圧倒された」と書いている(『海豹』のころ、『太宰治全集 第一巻 月報』一九五五、筑摩書房)。一号、四号、五号に連載された「思ひ出」の原稿はペンで書かれていたということだから、未知の同人たちを驚かすための実に太宰らしいアピールの仕方だったと言えるうが。

今官一「海豹通信」——太宰治を中心に(『現代日本文学講座 小説7月報』一九六二・二、三省堂)によれば、誌名を「海豹」とするにあたっては紆余曲折があり、「樗」という有力な対抗案もあった。実際「同人会の通知から消息、私信、その他なんでも、一見すれば同人たちの一週間の動静がわかるように、巧みに編集されて」いたというガリ版刷りの同人通信誌があったのだが、それは当初「樗通信」と題されていたのである。が、「海豹」を推す声のほうが多数になり、「樗通信」も「海豹通信」と名前を変えることとなる。

その「海豹通信」第四便(一九三三・二・一五)には、「故郷の話(3) 田舎者」という太宰の短い隨筆が載っている。今官一と同郷であることを言いつつ、「彼もなかなかの田舎者ですが、自分の故郷のほうが山奥であるから、私は、もっとひどい田舎者なのであります」と結んでおり、今は「ひでえ奴だと、舌打ちして読んだ」と言つ。「故郷の話」というのは編集の古谷による課題原稿で、第三号から掲載されていた

よつた。「海豹」創刊号が出た直後の第六便(一九三三・三・三)には「太宰治氏より」として、太宰から古谷に宛てた書簡の抜き書きが掲載されている。「先日はおいとましてから、急に酔いが発して大変でした。《思い出》を、一章だけ書き直しました。いちどに全部書き直すのは、大仕事で、すぐには出来ないようです」とあり、それに「思い出は、氏の力作。三章よりなる雄篇。やがて海豹を飾ることになるであろう」という古谷による註がついている(引用は今前掲より)。太宰はその他、第七便(一九三三・三・二五)の「創刊号内容紹介欄」に「魚服記に就て」を執筆しているが、このような同人間の濃密な交流の中で「海豹」が発したということは銘記されていいだろう。特に「海豹通信」において顕在化した「故郷」という主題は、木山「出石」(一頁)、神戸「故郷」(二頁)など、「海豹」に載つた複数の作品に共有されていくこととなるのであり、もちろん太宰の「思ひ出」もそのような文脈の中に位置づけられる。「海豹」が「地方から上京した文学青年たちが共同幻想としての」「ふるさと」を立ち上げていく場になっていた(安藤宏「海豹」、『国文学』二〇〇二・二二)とも言われる所以である。

太宰の「魚服記」が「文学」(一九三三・六)に掲載された乾直恵「葉緑素の感応——新人の創作を中心に」で取り上げられ、「この作品は小説と云ふよりは寧ろ一つの伝説をとりあつかつた散文詩とみた方がいいだらう」などと評されていることは注目される。とは言え、紅野敏郎「逍遙・文学誌」(84)、『国文学』一九九八・六)が言うように、「海豹」で太宰治以上に活躍しているのは木山捷平である「ことも確かだ。『東京朝日新聞』(一九三三・九・八)掲載の氷川烈(杉山平助)『豆戦艦』(8)には、『海豹』は『麒麟』などと等しく齒の浮くやつなひとりよがりのやぶにらみ的な六号記事などなしに、黙々として創作を並べてゐるのは好感のもてる行き方である。」とされ、「子におくる手紙」(木山捷平)は華々しい才気はないにせよ、立派な人生記録である。」と木山の作品だけが取り上げられているのだから。

「麒麟」は外村繁、小田嶽夫、中谷孝雄、蔵原伸二郎、川崎長太郎などによる同人誌であり、後に「小説」同人の尾崎一雄、丹羽文雄ら、「青空」の同人だつた淀野隆三、三好達治らと合流して「世紀」を創刊することとなる。「海豹」同人も参加を誘われていたようであり、「海豹」の解散がもう少し早ければ「世紀」の性格も多少違つたものになつていたかもしれない。(ちなみに木山は「海豹」の廃刊後に参加、「出

石」の改作「出石城崎」を「世紀」一九三四・九に発表している。）そのように数多の同人雑誌が割拠する中、ここで「海豹」が「好感のもてる行き方」として取り上げられ、しかもそこで言及された作品が木山のものであったことはやはり注目に値する。当時においては、太宰はあくまでも木山たちと同一線上に並ぶ存在でしかなかったものであり、この中から太宰が抜け出ていくのはまだ先の話であった。

小説だけでなく評論や翻訳についても見ておこう。評論で活躍しているのは何と云っても古谷である。

「川端康成論」(二号)は川端を横光に比較しつつ論じたもので、川端作品の特質を賞賛しつつもその限界に触れている。これは『横光利一』(一九三六、作品社)や『川端康成』(一九三六、作品社)に収録されており(前者は部分収録)同時代文学に対する鋭敏な批評家としての古谷の実質的な処女作と言ってよい。古谷は他に「寝園」の周囲(九号、前掲『横光利一』に収録)や「谷崎潤一郎」春琴抄「読後」(五号)などを執筆している。横光に言及する論者は他にも多く、たとえば(同人ではないが)唐木順三「新しき総合文学の誕生」(二号)は横光の言に触発されつつ、「思考力のインタアナショナル」と「伝統」との「総合的表現」の必要性を訴える。そこには、横光や川端ら一つ上の世代の文学者たちの動きに注目しつつ、その後を狙う青年たちの自負も窺えよう。

翻訳では、新庄の訳によってアンドレ・ジイドの「一粒の麦死なずば」(一号～三号)、「日記」(六号～八号)が掲載されていることが注目される。新庄は同時期にジイド『女の学校・ロベール』(一九三三、春陽堂)を訳しており、それについて志賀直哉が「文藝」創刊号(一九三三・一一)で賛辞を寄せている。この時期、ジイドは全文壇的な関心を集めるような存在になっていたのだ。一九三四年に『アンドレ・ジイド全集』が建設社と金星堂から並行して刊行されていることは、それを端的に物語る。太宰が「川端康成へ」(『文藝通信』一九三五・一〇)において、ジイドの『ドストエフスキー論』(一九三三、芝書店)を読んで「道化の華」を改作したと語っているのも、そうした時代の雰囲気抜きには考えられない。

「海豹」は九号(一九三三・一一)で廢刊となるが、古谷は翌年四月に檀一雄とともに「鷗」を創刊し、そこに太宰の「葉」や「猿面冠者」が掲載されることとなり、また一九三五年には木山から「日本浪漫派」に誘われることとなる。太宰にとって「海豹」で培われた人脈が重要であったことが理解されるだろう。